

Title	第1回フォーラム 地域運営学校（コミュニティ・スクール）とは？ ～岡山市立岡輝中学校の事例～
Author(s)	-
Citation	地域にとって学校とは・学校にとって地域とは？ - 地域再生と教育再生の相互作用 - : 135-152
Issue Date	2012-02-23
URL	http://ir.lib.u-ryukyu.ac.jp/handle/123456789/25802
Rights	

琉球大学学術リポジトリ
University of the Ryukyus Repository

第2章

フォーラム・地域運営学校（コミュニティ・スクール）とは？

第1回フォーラム：岡山市立岡輝中学校の事例

第2回フォーラム：京都市立御所南小学校の事例

第1回フォーラム

地域運営学校（コミュニティ・スクール）とは？

おかやましりつこう きちゅうがっこう ～岡山市立岡輝中学校の事例～

と き：平成 23 年 7 月 30 日（土）14：00～16：30

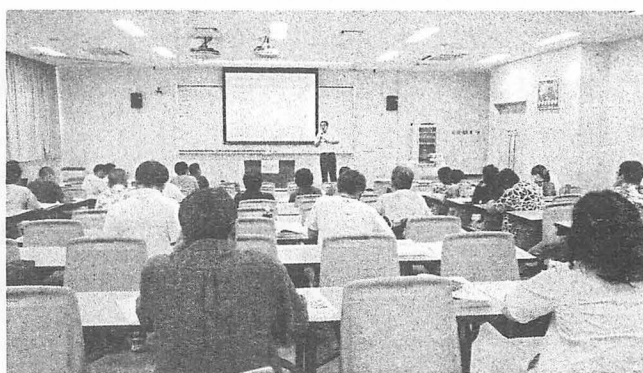
場 所：琉球大学 法文学部新棟 114

講 師：森谷 正孝氏（前岡山市立岡輝中学校校長）

昭和 47 年、高知大学教育学部卒。岡山県内の公立中学校に勤務後、平成 10 年度より岡輝中学校教頭 5 年、清輝小学校校長 1 年、岡輝中学校校長 6 年と長きにわたり岡輝中学校区を歴任。その間、長年の課題であった「荒れた学校」の解決のために、学校・家庭・地域が連携して学校運営に関わる地域運営学校の推進やシニアスクールの立ち上げなどを行う。



▲森谷氏



▲フォーラムの様子

第1部 講話「地域運営学校（コミュニティ・スクール）とは？～岡山市立岡輝中学校の事例～」

森谷 正孝氏（前岡山市立岡輝中学校校長）

みなさんこんにちは。岡山からやってきてまして、どれだけお役に立てるか自信はありませんが、実践してきたことについてお話をしたいと思っています。

教員歴は、ずっと中学校の教員です。中学校にずっといたわけなんですけど、どういうわけか1年だけ小学校にいたことがあります。昭和 47 年ですので、まだ沖縄も本土復帰していない時期だったと思います。高知大学のほうにも留学生という形で多くの沖縄の方が来られておりました。最初赴任した田舎の学校は、私たちが思い描いていた教員生活のままだったと思います。

次に岡山市に転勤になりました。この 9 年間は、私にとって授業研究の 9 年間でした。生徒たちは部活動をやればやるほど伸びていくんですけど、体育の授業として、これでいいのかなと思っておりました。その頃、全国体育学習研究協議会では授業作りが非常に盛んなときでした。体力づくり論から新しい体育への移行ということで、沖縄もその頃、県保健体育課長の新垣さんという女性の方が、リーダーシップをとり授業改革が行なわれていました。

それから、次に赴任した学校は、1 学年が 12 クラスもあるようなマンモス校でした。一人ではどうにもならないということを経験し、そこでやっと教員になったように思います。

当時、関西のほうでは、同和教育、部落問題が大きな課題となっておりました。その真只中に私も入りました。10年間勤務し、一人ひとりの子どもたちをどう救って、学力を保障して高校へつなげていくかという進路保障への取り組みに力を注ぎました。

次の学校に3年間勤務し、そのあと、岡輝中学校へとお世話になりました。でも、岡輝中へ行く自信は全くありませんでした。耳に入ってくる噂というのは、めちゃくちゃな学校でした。例えば、岡輝中の子が放課後何人かやってくるというと、よその中学校は、日頃いばっているような子でも逃げて行くんですよね。我々のほうも、「岡輝中が来るんだけど部活どうするかな。早く帰らせたほうがいいんじゃないかな」と、そんな話まで出るような学校でした。

当時、岡山では、刺繍服といって暴走族が着るような学生服の外に色々と刺繍をした制服を着た生徒がおりまして、東岡山竜操一家と書いているんですが、岡輝中学校の制服には西日本岡輝一家と書いてあるんです。桁が違いますね。そんな学校に行けと言われたときには、本当に務まらないんじゃないかと思っておりました。ところが、退職までの12年間（平成10年度から平成21年度）、教頭、校長として、岡輝中学校区に勤めることになります。

今日は、どれだけお役に立てるか分かりませんが、一通り私がやってきたことを1時間ほどお話しします。途中話ばかりでは面白くありませんのでDVD等入れながら、こんなことをやって、今こんなふうな考え方でこんなことをやっています、というようにところまで紹介したいと思っています。

まず、みなさんが持っておられる資料の中で『平成23年度地域協働学校づくり』というのがあると思います。その7ページには、「岡輝中学校区の取り組み」という見出しで、平成10年から平成23年までの取り組みの年表があると思います。このうちの平成21年度までが、私がずっと関わってきたところです。

よく私たちは「研究指定をバネにして頑張ってきた学校ですよ」と言います。そうすると、聞かれた側の先生方は、「先生、大変じゃったろうな。こんだけ色んなことをやらされちゃ、普通の教員はたまらんかったらうな」と思われます。ところが、実は、はっきりとしていたのは、これは学校運営に絡むような研究指定なんです。ということは、私たち校長・教頭が引き受けて取り組んだんです。だから、先生方は常に子どものほうに向いてもらおう。先生方に「今日は何々委員会があるから来てください」というような、そんな要求は一切しません。私たち管理職がこの研究指定を受けていきます。そして、何か相談したいことがあるときは先生方に相談します。「今度はこういうことをやろうと思うんだけど、どうだろうか？」と意見を聞く。なので、先生方は外部の方から「コミュニティ・スクールってなんだい？」と聞かれても、「コミュニティ・スクールって何かな？色んな人が来て話しをすることかな」というくらいの認識しかない。情けないことなんですけど、色んな人が来て色んなことをやっていることは知っておるし、今何をやって頑張っているかの自覚はできていたと思います。どんどんやっていくうちになんとなく学校が変わっていくから楽しいなと。そういう雰囲気になっていけたらなと思っています。今日は、その12年間で3期に分けて説明をします。

1期目の話に入る前に、「学びのひろば」という新聞記事の話をします。これは地元の新聞なんですけど、この記事が平成19年7月23日の朝刊（山陽新聞）に出ました。シリーズがずっとありまして、その最後だったと思います。私は気がつきませんでしたが、他の先生に、「これ、うちの学校じゃないか」と言われよく見たら、うちの学校のことだと分かりました。その内容がまさに平成9年のあたりですね。修学旅行で、ハウステンボスでの事件でした。嘘だろうと思っていましたが、新聞記事を見たら「二度

と来るな」と書いてあり、色々な人に聞いた話に近い事実はあったようです。それから、ナイフを持って「殺したろか!」という記事がありましたが、女の先生がナイフを取り上げるときに、握って取り上げ、血が出たということもあったようです。

私が平成10年に赴任したとき、そのような流れはすでにありました。全体的にはヤンキーと言われた子どもたちは好き放題でしたが、他の子たちはしっかりやっていました。ヤンキーと呼ばれる子どもたちというのは、職員室に土足で上がってきます。2階が職員室なんですけど、そこから一日が始まるという感じです。その子たちを出迎えて、「おはよう」と若い先生が迎えるんですね。「土足だから履き替えて、スリッパになれや」と。職員室にスリッパを置いてあるんですけど、素直に聞く場合もあれば、聞かないこともあります。中にはこうやって先生に足を出すんですね。そうすると、若い先生はこう脱がして、スリッパを履かせるんですね。これは、なんだ!と思いましたね。こんなことがありうるのか、と。それでも先生方は優しく迎え入れてやるという、それがまさに岡輝中学校の現状でした。もちろん、ぶつかり合いもたくさんありました。とにかく、授業妨害は絶対許すなというのがありますが、これは人権の関係でありますから、当然ぶつかり合いがありました。そうすると当然先生方に被害が出ます。そんなことがしょっちゅうありました。

その年の修学旅行も大変でした。出発式が終わったら新幹線に乗るのでホームへ行くんですが、学年主任はトイレ休憩を取るんです。「なんでそんなトイレ休憩とかありえんדר。新幹線にもちゃんとトイレあるし」と言うと、実はタバコ休憩なんですね。挙句の果てには、3年生の行動に対して、「教頭先生、今年はマナーがいいですよ」と。マナーがいいってどういうことか!と思ったら、みんながいないところでこそっと吸って帰ってきているからマナーがいいと。そういう言い方をする学校でした。

6月になると、廊下をロケット花火が飛んだり、女子生徒のスカートに命中したこともありました。近所の犬にどんどん物を投げるから、「うちの犬はノイローゼになりました、お陰で犬小屋から一向に出てきません」とか。また、もう少し隣のおじいさんからは「安心して死なせてください」と言ってくる。牛乳パックをこのおじいさんの家に投げつけて、床一面が真っ白なんですね。議員さんを連れてきて、「物を投げれんようすぐ横に、こんな高いネットを貼れ!」と。そういうこともありました。

平成9年の校長先生が4月に来て、2月に脳出血で倒れてしまって、その前の校長先生も脳梗塞で倒れて、2代続けてということでした。私は校長のいないところに来ました。私も元気だなと言われますが、平成16年、心筋梗塞で倒れてしまいまして、卒業式を1回キャンセルしております。でも、復活をしております。

こういう中で、新校長、新教頭、新PTA会長でスタートするという学校でした。行ってみますと、先生方は、「やることはやっている。知る人は知っている。何をそんなに学校を開く必要があるんだ」という感じでした。先生方は殴られてなんぼのもんじゃ!という中で関係を作ってきたと思います。「そうは言っても…」というのが校長先生で、毎日先生が殴られているのを見て、それでいいんだという訳にはいかない、というのが出発点だったと思います。

具体的な取り組みをこれから言いますが、キーワードは「学校を開く」ということです。学校が荒れていくときには、学校独自ではもうどうしようもない、というのは当然のことです。誰かに助けを求めていく。一緒に子どもたちの教育に携わろうというのが原則です。

学校を開く中で、地域連携が一つ出てくると思います。年表の中で「岡山東署パイロット指定」というのがあると思います。これは倒れられた校長先生の時に、岡山市内の4つの警察署全てが2年ずつ指

定をしていました。指定をしてくれというわけではなく、「最後にあなたの学校しか残っていないから、やってくれ」ということでこれを受けたわけですが、この指定のおかげで動けたわけです。私は教頭だったのですが、この研究について、すでに一人の教員がこのパイロット事業担当の責任者になっていました。ところが最初の企画の中で、「私は今年入ってくる子どもたちの学年主任をするようになって、とてもじゃないけど、こういうことはできない。降ろさせてくれ」ということが事の発端で、結局、「じゃあ私がやります」と受けたことで、管理職がやるという流れを一つ作ってしまいました。

それで、このパイロット事業を地域と連携してやっていくというときに、都会の方では地域が崩壊しているところもありますけども、岡山市には「岡山市青少年育成協議会」という市の組織があります。各中学校区にそういう健全育成の組織がすでに作られているんです。その健全育成の組織の中には、例えば、町内会長さん、民生委員、保護司さん、少年警察協助力の方、体協の方など色々な人が入っています。その中には、補導、環境、啓発広報、それから健全育成。さらに、岡輝中学校では地域連携の組織があるんです。それをうまく使っていけば、とりあえず地域は動くんです。動くようになっています。今までだったら、そういう地域を動かすその専門部の部長に充て職でつけていたんです。だから、「何小学校の PTA 会長さんは何役ね」とか、「何々さんは、この役ね」とやっていたものを、学校を変えるときには、充て職では力にならないと新しい PTA 会長さんが提案し、これがヒットしました。

このとき、私らも知らない 6 人衆が地域から出てきたんです。多くは PTA 会長経験者で、今は子どもがいない、でも地域で活躍をしたいとか、あるいは、学校のことをよく知っているような人が 6 人揃ったんです。その方々がそれぞれの専門部でイベントを中心にしながら色々な企画を行い、人を集めることに成功しました。たくさんイベントをやりますと、こういう人がいるんだな、ということが分かります。小学校は 2 つにまたがっていますから、中学校区で色々な人が子どもたちに関わっているんだなということをお互いが理解していきます。たくさんやることによって、ネットワークを深めていきます。これで非常に学校や地域の風通しがよくなってきました。イベントそのものは、大人向けのものもありますし、大人と子ども、地域と先生といったものもあります。

この中で私が一番嬉しかったのは、中学校の先生の動きです。行事の参加について「このイベントはどうなんだ?」「よし、分かった」「これはどうなんだ?」「生徒指導だけでいいと思う」など聞いてくれるので、スムーズな先生の動きができました。

厳しい生徒指導の中で、感心することがありました。そろそろ帰ろうかと言ったときに、車で校門を出た人が全員降りてきて、最後に一緒に校門を閉めて「じゃあまた明日な」と。それが自然とできた時は、素晴らしい学校だなと思いました。そういう仲ですから、先生方が今回は出るべきなのかどうなのか、常に聞きます。私たちを応援してくれた教員集団であったと思っています。

あとは、保護者連携です。もちろん保護者は学校に子どもがいますので、お願いすれば当然動く存在です。先ほど、平成 9 年の話も出ましたが、平成 10 年の修学旅行も大変でした。スペースワールドで、すぐ暴力事件を起こしました。また、2 年生の大山研修も大変で、「こんな調子だったんですよ」と私が報告すると、校長先生が「そんなら、もう修学旅行は辞めじゃ」と。校長先生は、「こんなことをしておったら修学旅行には連れて行けない。もう少し、ちゃんとお前らでせえよ」ということが言いたかったわけです。ところが、子どもたちの反応として多分「私らのところでなんで!」という反応が来ると思っていたら、6 割、7 割の真面目な子どもたちが「もう行かなくていい」という反応を起こしたんです。それで校長は、これをどうするか。もう保護者に返すしかない、と。「子どもたちがこんなことを言

っているんだ」と相談したところ、早速夜の保護者を1年間やりました。この子たちを修学旅行に連れて行くためには、私たちに何ができるかということでお話をし、無事、修学旅行を終えるということになりました。きちんと情報を出して、「こんな状況です」と言えば、保護者は子どもたちが一番可愛いわけですから、必ず動きます。

同時に、平成14年から学校5日制に変わるということがありましたので、PTAの規約改正も一緒にやろうじゃないかということになりました。足の運びやすい行事を作っていく中で、たくさんの行事をやりました。小学校への入学説明に保護者もついて行き、説明する。「怖い」「大変」と言うけれども、実際はそうじゃないんですよ、とお話する。このようなことをやりながらも小中の連携を保護者もやっていきました。

このように、地域や保護者と連携を行っていくと、学校は何をしているのかということになり、その証を示していくということが求められると思います。それが、小中連携です。まず、私が平成10年に岡南小学校の入学式に行ったとき、地域の体協の会長さんに「見てみい、ここにいる小学生は可愛いくて、ええ子なのに。なんで中学校に行ったらあんななるんや」ともろに言われました。やっぱりこういうふうに思われているんだな、と。それは、よう考えてみたら、小学校の先生もそう思っている人がたくさんいたのではないかと思います。「中学校の先生がちゃんとせんから、わしらが教えた子どもがこんなになるんじゃ」と。ところが、小中連携の必要を唱えて、本当にそうなのかとなった時に、いや、実は小学校の時に、この子はこんなことがありました、あんなことがありました、というのが出てくる中で、一緒にやろうということになりました。「中学校をどうするか、そのために小学校はどうあるべきか」というところから入っていきました。要するに、中学校3年間、授業放棄をしないで耐えて、そして勉強をやり、高校へ行ける、そういう子どもたちを育てるためには、小学校として何をすべきか、ということです。

この動きの中で、幼稚園に呼びかけました。小学校の1年生を見ていると、毎年毎年大変になってくることが分かっています。幼小連携をしましょう、ということになりました。ところが、一番大変なのは保育園なんですね、実は。幼稚園の場合には親が送り迎えをしたり、親が勤めをしないで家事をしている方々なので、子どもたちもあまり荒れていない。けれど、保育園は大変なんですね。小学校に上がってくる子どもたちを見たときに、絶対に保育園と小学校が連携しないと、小学校の教育はできないと思いました。すでに小中の連携はできていましたので、保幼小中という形で連携をすることになりました。

危機感を共有する中、公務員としてこの子どもたちをきちんと育てていくのは我々の使命だ、というところまで意識化することができました。この流れの中で作ったのが「岡輝版子育て法」という冊子です。一冊目は、中学校からの提案で作成したために、中学生のページが多く、成長した子どもをどうするかという子育て法になっていました。それでは意味ないということになり、就学前の子どもたちをどうするかということに力点を置こうということで保育園、幼稚園の先生がすごく頑張らして、改訂版を作りました。岡輝中学校の子どもたちの実態を踏まえて、オリジナルな子育て本を作りました。子どもたちの成長を真ん中に置いて、家庭ではどう関わるか、学校ではどう関わるかというようなことを中心とした書かれ方になっています。これが保幼小中、0歳から15歳までの連携の証として現在も残っております。

これを契機に、保育園が夏季研修に参加をすることによって集大成ができたわけです。この夏休みに

もやりました。100 人を超えるわけなんですけど、それぞれのところへ分かれてお話、分科会をする。研究をどうしていくかということを話していきます。その第 1 回が終わったあと、必ず親睦会をするんですが、だいたい 80 人ぐらいの方が集まってきて、にぎやかに飲むというのが定例になっております。こうやってお互いが前を向いてやっていれば、少々のことはだいたい人は許してくれます。「こんなことをやって頑張っているんですけれども」と言うと、「あとは頼むわ!」という関係が出来上がってきます。

その中で、「同じ職員室論」というのができてきました。職員室の中に、ただ保育園の島があったり、小学校の島があったりするんですが、同じ考え方を岡輝中学校区で持とうやというのが、ある程度意識化されてきました。

同じ職員室論、と同時に、その時の教頭は、「瀬戸大橋論」というのを出しました。瀬戸大橋という橋がありますか?ありません。一つ一つつないでいって瀬戸大橋になります。我々も一つ一つをつないでいって瀬戸大橋になろうというものです。

岡輝中学校区には同じ職員室論と瀬戸大橋論というのがありますから、いつでも困ったことがあったら、連絡し合います。例えば、保育園で「あの子の妹がおるんだけど、めっちゃくちゃなんだ。お姉ちゃんは中学校でどうしているのか?」と中学校に来たりします。「お姉ちゃんは、ちゃんとやっているし、親とも話しができるよ」となれば、「じゃあ一緒に家庭訪問行かない?」と。保育園の家庭訪問に中学校の担任が一緒に行って、母親と話をするとか。そういうふうな関係もできてくると、非常に風通しがよくなってきます。そういうのが保幼小中の連携の中で具体的に起こっています。

4 つ目は、関係機関との連絡です。これはもうしっかりとやっていく。中でも、「対教師暴力は絶対に許さん」という校長方針がありましたので、あとのことは校長が責任を取るという方針がありました。厳しい校区でしたので、なかなか事件を起こしても警察を呼ばませんでした。「子どもを警察に売るのが」というふうになります。そういう歴史の中、先生方も頑張ってきましたが、「そんな時代は終わった。報告するような時代になったんだ」と、校長方針の下、必ず通報して、対教師暴力事件を減らすことができました。

次は、情報公開です。書き物であるとか HP であるとか色々あると思いますが、その中で、私たちが直接、情報公開する組織があります。一つは民生・児童委員会です。守秘義務があることを信頼・信用し、「あの子を少し見てもらえませんか?」と言うことができました。これが成功したのは小学校です。民生委員会をどこでやるかという、小学校でやるんです。そこへ行って、特に不登校の問題についてお願いをする。これが成功して、一度ゼロになったことがあります。主任児童委員さんが朝、子どもを起こしに行くといったこともありました。

また、色々な人がおられるコミュニティ協議会や社会福祉協議会では、できる範囲の提供をしました。連携の前提は情報公開ですから、情報公開をして、学校がやるべきこと、家庭がやるべきこと、地域がやるべきことを仕分けていくのです。だからまず、学校が情報公開に思い切って踏み出すことだと思います。もちろん、個人情報として出せない部分はありますが、多くの部分を出すことによって、協力が得られると思います。

こうやって頑張り抜いて、平成 13 年度、いわゆるその刺繍服と刺繍服軍団がとりあえず消えました。と同時に、登校してくるヤンキーの場所が職員室ではなくなりました。私は教頭の席でずっと、やってくる子どもたちの相手をしていました。4 年目にして、荒れの克服までには至りませんでしたが、多くの人の連携によって、なんとなく負の部分が見えなくなったというか、外に出なくなったように思いま

す。活躍している色んなことを外に発信していく中で、学校が落ち着いてきたかなという感じです。

こういう中で平成 14 年度に学校運営に関する実践研究ということで、いわゆるコミュニティ・スクール、地域運営学校の研究指定を受けることになりました。京都の御所南小学校など、指定を受けるのにふさわしい学校ばかりでした。民間校長が入ったりして、教育委員会が路線を引いてあとは宜しく、という感じでした。こうした中、私たち岡輝中学校は、何で私たちがという感じでしたが、地域の方々がここまでやってきてくれたんで、もう少しレベルアップするために頑張っけて受けようという思いで受けることにしました。私たちは、その中で、保幼小中でやってきたので、せめて小学校 2 校も入れてくださいというふうにお願いをして、中学校区で受けるという形の研究指定を受けました。残りは全部、単独校で受けるという形でした。どのようなものなのか、DVD をお見せします。平成 16 年に法律ができた時の紹介です。

～DVD 視聴①『コミュニティ・スクール 岡輝中学校の取り組み』～

- ・地域運営協議会
- ・シニアスクール
- ・地域の課題

気になったことがいくつかあったと思います。1 つは、学校運営の最高の意思決定機関という言葉が出ましたが、校長が最高の責任者には変わりありません。ただし、校長のやり方と学校運営協議会がぶつかってしまったときには大変なことになるというのはあります。実際には、ありませんでしたけどね。もともとは、学校支援組織です。色んな保護者の意見、地域の意見を入れながら学校運営をしていくことにより、地域の歴史と文化を大切にしながら特色ある学校を作っていこうということなので、ぶつかることはそうありませんでした。

学校運営協議会の責任と権限の中の 1 つに、「承認」というのがあります。これは、学校長が提案した学校運営計画を承認するということです。

2 つ目は、人事への意見です。12 月には人事について教育長のところへ意見書を持って行きます。岡山市の場合には、具体的に「こういう教員が欲しいからお願いします」ということは言ってくれるなどなっています。市教委は、全市的なバランスを考えながら人事をしていますので、無理矢理こういう人という訳にはいかないのですが、「今、こういう課題を持っています」ということをお願いをして、「戦力ダウンにならないような人事配置をお願いします」という形で穏やかに、一応要求はしています。戦力ダウンにならないような人事配置をなさというのは結構きついわけですが、そのことによって教員の資質が低下せずに、学校運営ができています。

こうしたコミュニティ・スクールを、校長として 6 年間やりましたが、緊張関係が毎回あります。こんなことを言ったら、多分あの人はこういうだろうな、とか。よし、こう言われたらこう言い返してやろうか、とか。月に 1 回続けてやっていると、この適度な緊張感が私の中で、意欲のダウンなくやってこれた一つの要因だと思っています。

地域の連携ということで、岡輝中学校では「シニアスクール」というのを作りました。イベントだけではなくて、日常的に地域の人が学校に入り、子どもたちと心の交流をしていく。同時に、シニアの方たちの生涯学習や講師に来られる先生方の生涯学習ということを考えて、開校をしました。これも面白

い取り組みです。多くの視察の方に、「シニアスクールがあるんですよ」と見せてあげると、「え、これ何!？」と非常に喜んで帰っていかれます。他県の議員さんたちもうちもやりたいなという形で視察はありますが、なかなか岡輝中学校のように、教育委員会と行政に頼らず、自分たちで NPO を立ち上げて賛助会員を取ってやっているところがないようです。

そのシニアスクールとはどんなものか。今、岡輝中学校では週に 3 日、清輝小学校では週に 2 日、岡南小学校では週に 1 日、シニアスクールをやっています。学校教育の中にすっかり溶け込んでいます。

～DVD 視聴②『見て！マイスクール』～

- ・ 岡輝中学校生徒会による学校紹介
- ・ シニアスクールの入学式
- ・ 生徒とシニア生の学校生活
- ・ シニア文集

このように、週 3 回、子どもたちと同じ時間に登校して、給食を食べて、まったく同じ生活をしながら過ごしているということです。なかなかいい取り組みなんだけど、実際やるとなれば、色んな形で大変だと思います。

これがうまくいっているのが、福岡県飯塚市の森本教育長さんが作った学び塾です。各小学校でシニアスクールを作っております。全く違うんですけど、1 時間目が頭の体操、2 時間目が自由時間、3 時間目が学校支援ボランティアとして入るというふうにやっています。シニアスクールをモデルとしてやられた例です。

学校に異物が入るというのは、学校側は非常に拒否感があるんですね。みなさんもよく分かると思います。その時、地域の藤井さんがなんと言ったかということ、「できんできんと言うのは、わしらもよう知っている。教室一つ借りるにしても、地域のもんが入っていくには許可を取らないといけない。異物が入るということで、色んな障害もあることも分かる。しかし、それじゃあ話にならない。要するに、先生らは何年か勤めたら去るんやろ、わしらは残る。だから同じ土俵に上がらないと話にならん」と。地域の学校への想いがよく分かる発言でした。このことを通して、我々教員がどのように応えていくのが、教員の責務だと思いました。どうせ無理だというのではなく、どうすればその無理を突破できるのかということをお互いで考えていこうというものです。

あと第 3 期の話が残っています。こうやって色々やってきたんですが、残された 3 年間のうちの大きな課題が「学力」と「不登校」の問題でした。

平成 15 年あたりから、生徒指導の原点は授業だということで、授業改革をやってきました。でもその授業は、全部一斉指導の授業形態でした。TT という方法で教室に 2 人の先生が入っていく。また、その 2 人の先生が教室を 2 つにわけてやっていく少人数制、さらには、習熟度別の少人数授業など、色々やってきましたけど、全部個別対応なんですね。個別対応の限界というのがはっきりと出てきたんです。しかも、今の教室の状態というのは、非常に厳しいんですね。教室の中では、子どもがちゃんとして、授業を受けることが前提になっています。それを前提に教室の中を見てみると、A、B、ちょっと成績の悪い C がいます。ところが、今教室を見ると、A、B、C だけではありません。まず D というのがいます。何かというと、教室と廊下へ足をかけている子がいます。面白くなかったら、ぷいっと外に出る。

面白かったらぶいっと中に入る。荒れた学校になると、初めから外に出ている E という子がいます。そして、最近問題になってきた F という子です。F は何かというと、いわゆる発達障害的な行動を取り、人間関係が作りにくい子のことです。要するに、教室には ABCDEF がいるというのが一般化された教室の状態なんです。そういう中で一斉授業を通して全ての子どもに居場所を作るような授業はできるのか、もう不可能です。その辺から、これはどうにかしなければならないというのが出てきました。

これは平成 17 年 6 月 27 日の夕刊の記事（山陽新聞）です。「協同学習」を始めるきっかけでした。近くの学校でやってないかなと探したら、広島や大阪に豊川という学校がやっているということがわかって、そういうところへ先生方と授業を観に行くということをしました。たまたま、まだコミュニティ・スクール推進事業の研究で予算的に恵まれていましたので、どんどん先生方を行かせました。日曜日の公開授業などには、20 人ぐらいの先生がそこへ行って勉強してきました。そういうことをやりながら平成 18 年の 2 月に職員会議で、やるかやらんか決めんかという提案がありまして、半分くらいはまだ勉強してない職員もおるから、平成 20 年の 4 月として 1 年猶予を置こうや、という形で決まりました。

そうしている間に、「公立中学校の挑戦」という本を書いた佐藤雅彰先生が広島に来ることになっていましたが、その学校がキャンセルしたので空いているという話を聞きつけ、連絡を取り、来ていただき勉強会をしました。その会の後、研究主任が「平成 19 年度の春からやりましょう」と。みんな否定しなかったんですね。それならやりましょうということで、平成 19 年からスタートしました。

教室がコの字になっていたんですね。コの字というのは、みんなの顔が見える。そのことだけで、一気に子どもたちの雰囲気が変わりました。色々、説明すれば長くなりますので、とにかく変わりました。1 年目が、一番落ち着いていたかもしれません。2 年生が 1 年生のときにめちゃくちゃだったんですけど、コの字に変えた途端一気に変わりました。しかし、2 年目は保護者の中で、「なんか協同学習は、分からない子どもたちにとってはいいみたいよ。なんぼでも聞けて、その中で、学びあったりしていい。だけど、うちの子はよくできるから、そんなことばかりしていたら損である」と。うちの子は教えるばかりで損だという保護者の意見が出てきました。みなさんのところに㊦で資料がありますが、6 月と 1 月の棒グラフが載っていると思います。これがその時の 3 年生全体の 5 教科の点数の分布グラフです。要するに、1 月になった時に、上位層の点数がガバーと上がっているんですね。これで、保護者が文句を言わなくなりましたね。ただ下位層は居場所はあるけれども、そんなに伸びない。でも毎日の授業には居場所があるから参加している。そして 3 年目、学年は違いますが、全国学力調査で 3 年目に追いついちゃったんですね。3 年間の実績というのが、はっきりとした具体的な数字として示すことができ、学校の雰囲気も変わり、力をつけました。やっぱり協同学習というのは良いというのを示すことができました。具体的に協同学習とはどんなものか、今日はなかなか時間がないので、関心がある方は勉強していただければと思います。

色々と考えてみますと、今なぜ協同学習かということになると、先ほど言ったような学校の空気が非常に穏やかになるとか、あるいは先ほどいった成績が伸びる、教室の ABCDEF に対応するということで、力を発揮します。こうやって協同的な授業をやるようになって、小学校の授業なんかでは、良い授業をやっているんですが、一人ひとりの子どもたちを見たときに、どんどん落ちていく子どもたちを見ていくことができます。答えが 1 つだから最初はみんな手を挙げるんですね。ところが、だんだん難しくなってくると、手が上がる数が少なくなり、授業から落ちていつている子どもを見ます。それでも、迷惑をかけたらいけないから分かるような顔して、頑張っています。あの子も落ちたというのがだんだん見

えてきます。そして最後の質問で、手を挙げた子が3人くらいいて、答えを発表すると、「その通りだよ！よく出来ました！」となると、見ていた保護者の方は「良い授業だったね」と。授業規律もありました。とんでもないことなんですね。これをずっとやられて、そのまま中学校へ来たなら、家庭環境でもしっかりしていないと持ちこたえられないんですね。それがだんだん分かってくるということなんです。ところが、それに気がつかない先生が随分おるということです。自分に困り感がないから、行き着くところまで行き、授業規律を保ち、ハイハイという元気のいい授業をできたと思っています。しかし、子どもの立場になったときに、これでいいのかということになりました。このことは、小学校の先生の中でも、ズシンとくるものがあつたと思います。

また、中学校では部活動で鍛えておりますが、家庭的な基盤が弱いために、朝練に来れない子が増えてきました。そうなると、運動部の加入率が70%を切っております。でも子どもたちは学校へ来ます。そうすると、部活動では救えない。どこで救うかという教室の授業でしか救えないわけです。教室の中で全ての子どもたちの居場所を作っていく。授業改革しかないわけです。

今求められている学力というのは、思考力、判断力、表現力といいます。協同学習は、結果としてそうした力をつけていくことが分かってきました。協同学習を推進している学校は学力調査なんかでも、B問題に強いです。また、推薦入試で素晴らしい結果を残すことができました。

協同学習の基本は、「分からない、教えて」ということです。「おまえ、分かってないから教えてやろうか？」という関係ではありません。教えてという関係、その時に聞かれた子どもは誠実に教えていく。教えきらないと、本当に分かったことにはならない。このことで力をつけていく、大きな力にもなっていくということです。この関係をずっと続けていくと教室の中で辛いことが言えるようになってきます。そういう関係ができてくると、いじめなんかもなくなっていくます。授業を通して子どもが育っていくという形になっていくのです。

先生と生徒の関係も非常に柔らかくなっていきます。授業の中で、仕草であるとか、眩きであるとか、表情を先生は見ながら授業をしていますので、一人ひとりの子どもを理解しよう、理解しながら授業を進めるとというのが基本です。子どもにとっても先生がこれだけ僕たちのことを考えてくれているんだとなると、これも荒れない学校を作っていく一つの方法になると思っています。

授業公開の中では、「板書をきれいにせえや」とか、そういう話は一切出ません。子どもがその授業の中で、どういうふうに学んでいったかを観ますので、教科の壁が越えられるんです。例えば、数学の授業を見て、体育の先生が、「先生の授業、子どもが全然ついていってなかった」とか、「先生の課題や発問の出し方、やっぱりそこに問題があるんじゃないの」などが話されます。また、この子は、その時、教材と結びつき、学びが始まった。こうした授業の協議を重ねていくことで、一人ひとりの子どもを理解しようとする先生と子どもの関係が作られていきます。まさに、生徒指導の原点が授業にあると言えます。全ては授業で勝負です。部活動をばりばりやって、生徒指導をガンガンやっても授業がさっぱりな先生が時々おると思います。先生が恐いから、みんな黙ってやる。でも、それは授業じゃないと思います。協同学習に取り組むようになってから、女の先生、子育てで忙しい先生、立場上弱い先生でも授業なら勝負ができるんです。同じ土俵に上がれるということです。

子どもを語る協議会では先生と先生もつながっていきます。これが、私のテーマである荒れない学校はこうやって作っていけばできるんだということを実感した3年間でした。そして、今年で5年目をやっています。そういう意味で、私は協同的な学びを取り入れた学校づくりは大きな力になると思っています。

ます。私がやってきたのは、排除の理論を捨てるということと、学校は授業で勝負をするところだということ。速効ではなく、じっくりと。そのためには、15年間かけてじっくりと子どもを育てていこうやということ。そして、保護者には、批判よりも応援を、選ぶ学校から作る学校への転換を、ということ。公立学校というのは色んな人がいて、面白い。そうありたいと思っています。

あとは、質問等でお話していただければと思います。

～休憩 10 分、DVD 視聴③『現場に立つ』～

第二部 論点整理と質疑応答



コーディネーター／前城 充氏

(沖縄自治研究会メンバー、南風原町立翔南小学校 PTA)

コメンテーター／島袋 純氏

(琉球大学 IIOS「人の移動」プロジェクト現代沖縄研究班代表)

講師／森谷 正孝氏 (前岡山市立岡輝中学校校長)

(敬省略)

前 城：冒頭で、島袋純先生から今回の趣旨の説明がありました。それに沿った論点の再構築をしてくださいますので、宜しくお願いします。

島 袋：この研究は、研究報告書として作成しますので、その研究目的に沿った質問をさせていただきたいと思います。この研究では、地域との関わりをどうやって作っていったのかということが重視されています。一番重要な質問なんですが、この学校運営協議会の方法を導入するようになって、地域社会がどう変わっていったのか、ということをもまずお聞きしたいなと思います。当時の学校がひどく荒れた地域だということを話されていましたが、学校は地域社会の鏡、あるいは社会の鏡であるという言葉があります。おそらく、地域社会において、地域や社会に参加できない家庭というのが出てきていて、地域社会の影響力が非常に弱かったのではないかなと考えられます。そういった地域社会のあり方が、学校運営協議会を作ったことでどのように変わったのか。地域の公的課題の一つとしての学校の課題を、地域運営学校は、地域による解決をどう目指して、地域社会はどのようなつながりを取り戻していったのか、ということです。

それから、地域の方々がシニアスクールで学ぶということがありました。地域の方々が学校の中に入って、正規のカリキュラムの中で授業を作っていく。授業を提供していく。共に学び合いながら、共に教え合う。子ども同士の学びの場があり、それから教師同士の学び合いの姿があったということですが、地域の方々と教師の学び合いの姿、それから、地域の方々と子どもたちの学び合いの姿、そういったものが実際にどう作られていったのか、まだそこまでは至っていないのか。その点について、どういう取り組みをされたかというところをお聞きしたいと思います。

それからもう1点は、地域コミュニティ推進協議会の中で「学校はこうあるべきだ」などと話し合うと、学校側は地域運営委員会の提案を嫌がって、地域の方々が授業に入ってくることや生徒と接触するのを嫌がってあまり積極的にやろうとせず、今までのやり方が一番いいんだという意見がもしかしたら出てくるかもしれない。閉じた学校を前提として育ってきた方ばかりなので、こういった先生たちは、どのようにして開いた学校の理念、地域の方との結び合いを深めていったのか。先ほどのDVDに出ていた先生も素晴らしい先生だったんですけど、簡単にはあんな先生にはなり得ないんじゃないかと思います。非常にハードルが高いことなので、もし地域の提案を学校長が受け入れて職員に下ろそうとしたら、職員の側は拒否するのではないかと。そうすると、校長先生は右往左往して二進も三進もいかないということが起こる可能性もあるだろう。価値観が合わなくて紛糾した部分もあったんじゃないのか、ということをお聞きしたい。

今回の調査では、地域社会がどのようにつながりを持っていくかというのが大きな課題ですので、この点について、私のほうからは以上3つの質問をさせていただきました。宜しくお願いします。

森 谷：まず、地域との関わりということの岡山市の場合を考えてみたら、私の地域でも町内会に入っていないというのは、いよいよ変なおじさんと変なおばさんの関係で、ほとんどいない。我々が住んでいるところは当たり前という感じです。町内会費はちゃんと取り上げるというのが、もともとある環境ですし、地域には地域の健全育成の組織があったり、民生委員会の組織が動いてお年寄りの見守りをやってみたり、色んなことをやっております。ですから、学校が開きさえすれば、それなりの人たちが地域にはいらっしゃるという、そういう組織が前提となっていますので、そういう組織がないところで、学校をどうするのかということについては、なかなか難しいなと思います。ただ地域の中には、学校のことを思っている人たちが掘り出していけば必ずいるんじゃないかなと思います。組織からの推薦じゃなくして、1本釣りでもかまわないと思うんです。あるいは、公募という形でもいいのではないのでしょうか。

実は、平成14年からのコミュニティ・スクールの研究に入る前に、岡山県からの研究指定で「いきいき支援スクール支援事業」がありました。この指定は、岡輝中学校が動き出しました。この岡輝中学校の動きを止めてはいけない、というのが教育委員会のねらいで、予算をつけるけど研究発表もないというものでした。ただ、1つだけ要望されたのが、「いきいきスクール推進委員会」を作れというものでした。地域の方、保護者の方を入れた委員会のことです。パイロット事業の中で、お話ししました6人衆の方々が地域代表として、推進委員会にそのまま残るという形になりました。このメンバーは、1本釣りです。PTA会長のネットワークで、参加された方々です。

次に、新しいコミュニティ・スクールの実践研究をやるときに、大きな集まりの中で、岡輝中学校はこういう研究指定を受けて、地域学校協議会を設置するんだ。これはある程度の権限を持って、学校運営に参画していくんだということを説明したときに、ある地域の方々が、「なんで〇〇がこのメンバーにおるんや？」ということが出てきたんですね。地域運営学校のメンバーになる人たちの中に多分、そういうことを言う人がいるだろうと思ってはいま

した。要するに、推薦基準とかがない中で進めてきましたので、案の定出てきました。そこで、「今までにこういう実践力があるんでお願いをしました」と。「とりあえずこの3年間の実践研究における委員の中には入れてください。それで3年たったら、その次には方向を考えます」ということで、あとは何も言われませんでした。そこで次の「コミュニティ推進事業」の研究指定において、一気に公募に変えました。公募によって、学校運営に参加しませんか？という形をとりました。ところが、公募によるとどなたが来られるか分かりません。政治的に利用しようとか、学校は生ぬるいからびしっと言わないけんとか、そういう方がいろいろ来られる可能性がありますので、直接委員会に出席できるのではなく、地域部会というのを作って、かつての6人衆を含めて協議し、この人だったらいいですよという網をかけて、委員会に推薦をするということで、そのことについては乗り越えてきました。組織がないときには1本釣り、きちんと理由付けや説明ができればいいと思います。その1つとして公募というのものもあるんじゃないかなと思います。

それから、地域と共に学ぶということについては、学校支援地域本部事業というのがコミュニティ・スクールの延長から出てきましたけれども、岡山市ではこれを有償で、地域コーディネーター事業というのを開始しました。地域の人と共に学んでいくというのは、新しい学校、将来のコミュニティ・スクールの中で、新しい公共というのが島袋先生の話にも出てきましたけれども、目指す学校像の1つになると思います。岡輝中学校区ではシニアスクールができた段階で、かなり、中学校の授業に入っていくのは難しいんですけど、小学校では昔話をしてくれとか、戦争体験の話をしてくれとか、シニアスクールが活躍する場面が増えてきました。そういう中で、色んな方が学校に入っていくということに関して、抵抗感が少ないということがあります。遠足が何日にあるが、引率するのに少し人が足りないなといったときに、コーディネーターをお願いして手伝ってもらおうというようなことも一番手っ取り早い方法です。こういうことができるような仕組みがだんだんできてきています。

目指す学校像としては、これからのコミュニティ・スクールの学校像として、「地域住民の参画への促進」「地域力を活かした学校支援」「学校力を活かした地域づくり」の三本柱があります。岡山市では、コミュニティ・スクールの指定を23中学校区で受けております。それぞれうまくいっている、いっていない、ばらばらです。もちろんばらばらですけど、元になる考え方がかなり浸透しつつあるんじゃないかと思います。地域の方がどんどん入ってくるというのは、シニアスクールを通してでも、さらに地域コーディネーター事業として入ってくるというのは、結構あるんじゃないかと思います。

それから学校を「閉じた社会」から開いたということですけど、先ほどの平成9年の段階で、我々はやることはやっている。いちいち説明する必要はないという教員集団の中にありましたが、時代の流れが完全に動いており、そういうことは言っておれないということが前提にあったと思います。岡輝中学校の取り組みの中で、いわゆるイベントを中心にしながらやってきたわけですので、先生方も土日に必要であれば出なくてはならない状況がありましたが、あまり抵抗感がない状態でした。ただし、これは中学校のことです。元々、部活があったので土曜・日曜に出てくることに抵抗がなかったわけです。ところが、これを小学校に下ろしたら、大変な抵抗があります。土曜・日曜出てくるという習慣がないもんですから、

勤務の振り替えなどが、当然出てきます。そこを中学校と小学校の連携で、「そんなこと言わんと、地域の方々もボランティアで出てきているんだから、お前らも出て行こうや」と。そういう雰囲気を中学校から作っていました。

次に、シニアスクールについてお話しします。平成 15 年の 9 月に試行開校しました。そうしたら、岡輝中学校がなんかえらいことをやっているということで、報道機関がどーっと来ました。たまたま 9 月という時期は、子どもたちの部活動が終わって二学期に入ります。ところが、部活動を終えた子どもたちが一気に崩れたんです。夜な夜な集まったり、授業放棄が見られるようになりました。ちょうどそのときに、シニアスクールが開校したわけです。学校側は、心の交流ということで何かしなければ、と。また、地域の方々も何かしなければという関係になり、教員とシニアスクールがギクシャクしました。何のためのシニアスクールなのか？子どものためのシニアスクールなら、なんで先生たちが子どもたちに関わらないといけないときに、年寄りがうろうろしているんだ、というのが最初の出発点でした。次の平成 10 年度、私が清輝小から岡輝中に帰ったときの最初の課題がそれでした。これをどう解消するのかということでしたが、「もう何もしなくていい」、そこから出発しよう、ということになりました。もし、雰囲気的に給食を一緒に食べることができるようになったら食べようぐらいにしました。一緒に生活するだけで落ち着いた環境を作ってくれているのだから、それでいいのだとしました。シニアスクールの人たちも、8 時になったらみんな集まって挨拶運動をしたり、周りの草を取ってくれたりもしました。「おられるだけでいい」という感覚で行こうということで、先生方は納得してくれました。また、シニアの方も、「あーそれでいいんだ」と落ち着いたのが最初のきっかけだったと思います。

前 城：ありがとうございます。

これから会場のみなさんから質問を受けたいと思います。時間の関係もありますので、1 人、2 分程度でまとめてください。挙手をお願いします。どなたかいらっしゃいますか？

質問者 A：こんにちは。那覇市の自治会におります。地域の人たちが学校の人事の権限を持っていると聞いているんですけど、それは具体的に、校長先生が「この先生がいいですよ」と推薦するイメージなのか、それとも教育委員会から「今度の先生はこういう人ですよ」ときた時にそれを承認するイメージなのか。あと、一般の先生方も、「この先生いいから来年も宜しく願いします」ということで、要望していけるのか。そこらへんが聞きたかったのと、別件なんですけど、学校でお酒飲んでいるかというのを聞きたいなと思います。

森 谷：人事の件については、一応、学校の事情を説明しますけれども、基本的には「戦力ダウンにならないような人事配置をお願いします」という意見書をもって、会長と地域の方が教育長にお願いするという形を取っております。校園長の人事に関しては、学校運営協議会に毎回校長が出席するので、この校長は、私たちの要望を理解してちゃんとやっているかどうかというのは、毎回出ていたら分かります。だから、校長の人事については、協議会が意見書を作ります。一般の教職員に関してはよく分からないから、校長が意見書を作ります。

まとめると、一般職員の人事に関しては校長の意見を伝える。校長に関しては、学校運営委員会が意見を申し上げる、という形をとっています。

そのような中で、1 回だけ教職員の人事について説明を求めに行ったことがあります。そ

れで人事が変わるということはありません。一応、そういう形でやっています。形通りかもしれませんが、法律を活かして意見書を提出しています。

それからもう1つ、「学校でお酒」に関しては、現在ははありません。

前 城：岡輝中学校のほうには何年間いましたか？

森 谷：教頭で5年、同じ校区の小学校で1年、戻って6年。12年間です。

前 城：岡山県内でも長期でずっとここにいる先生というのは、いっぱいいるんですか？

森 谷：いません。私自身がびっくりしています。教頭を5年やって、校区の小学校に行くわけですから、みんな笑って「何しにきたん？」と迎えてくれました。それでも、中学校に戻ると言ったら、そのときにはみんな笑いませんでしたし、私も笑いませんでした。えらいことになったと思いました。これも裏を返せば、学校運営協議会の中で何らかの力が動いとったのかなと憶測はするんですけど、分かりません。

前 城：分かりました。

それから、みなさんの学校ではお酒飲みますか？いいところもありますよね。うまく活かしてくださいね。

他に質問ございますか？

質問者B：自治会の会長をしています。学校と自治体との関係で聞きたいんですけど、私の自治会があるところには、コミュニティ作り推進委員会、地域懇談会、学校の校長先生もあるいは自治会長が参加をする場が結構たくさんあります。しかし、その場が形骸化していて、学校の問題が問題として出てこない。地域の課題が課題として出てこない。実は、不登校の子、だいぶ荒れた子も地域にはいるんですが、その子について話をしたいという話をしたときに、やっと学校の校長が返事をしてくれる。でも、その子については、学校でチームを作って検討しているので、という話になる。本当のことを変えようと思うと、地域のことを含めて変えていかないうとできないんだろうなと思いながら、今のような状況になっています。

やっぱり、一番の問題は学校かなと私自身は思っていて、先ほどの話は先生の意思、先生の個性として立派だな、と思いますけど、実際には、そういうことが沖縄ではできないんじゃないかなというのが今率直の悩みです。地域を変えたい、学校と一緒にやってよくしたいと思っても、なかなか一歩踏み出せないということについて、先生の考えをお聞かせください。

森 谷：学級経営の中で個人情報子どもたちに出さない限り、子どもたちは関われないだろうと思います。私たちは、荒れている子どもたちに関わらせようとしてしました。成功しました。こいつはこんなに暴れているけど、家ではこんなだし、お父さん・お母さんがこんな状態の中で、よく学校に来ている。こいつは決して悪い奴じゃないんだよ、というような情報を流すことで、安心して付き合っていくことができました。しかし、今は地域へ個人情報を流すというのが難しくなりました。小学校、中学校で、学級便りに写真を載せるときでさえも、この子が写っているからだめだとか、中体連の冊子なんかでも全部許可を最初にとります。ましてや厳しい子の個人情報を地域の方たちに出すのは非常にきついと思います。そこで、個人情報を出せるところへ出す、というのがスタートかもしれません。例えば、民生委員（守秘義務がある）のところへはシビアなものを出していいかなと思います。また、地域にも、

この人だったら大丈夫、という人もおられると思います。様子を見ながら、出していくことは必要だと思います。

地域教育懇談会などもやられているようですけれども、岡山市でもそれぞれ色々な活動を取りながらやってきております。基本的には、各町内で非常に小さい単位で膝を交えて話しましょうと。学校のことも出しますが、基本的には地域の問題を皆で考えましょう、という形で学校の先生も出かけて行きます。その会につきましては、「岡山市青少年育成協議会」というところで、予算組みをして運営できるようにしています。重い子に関しては、ケース会議を当然やります。そこでは、地域の方々が守秘義務を持っている方々には思い切って出しますが、そうでない方にはなかなか出せないという現状があると思います。そういう意味で町内会長さんには、守秘義務があるわけではないので、人によってはこの人に出したらえらいことになるなということがありますので、その辺の難しさは我々も同じように感じながらやっております。こうしたことから、重たい子をフォローしていくのは非常に難しくなっているのはよく分かります。

前 城：南風原でも、小学校・中学校の連携によって、幼稚園・保育園が関わってきたという話がありました。中学校で課題が出てきている子の背景に、小学校、幼稚園が必ずあるんだという気付きが住民の中から出てきたんですよ。この連携はとっても大事だなと。ケース会議に私も出たことがあるんですが、縦横の連携に気付くというのは地域にとっても大事だなと思いました。

では、続いてどうぞ。

質問者C：教育学部で教鞭をとっています。3つほど簡単な質問を。学校支援地域本部支援事業は今年から国の補助事業になったんですが、岡山の地域コーディネーター事業は単独でやられているのか、補助事業と言う形でやられているのですか？

森 谷：岡山市単独です。（※帰って確認したところ、国が3分の1、市が3分の2の事業です。）

質問者C：2番目は、学校評議員制度はどうなっていますか？

森 谷：評議員制は、23 中学校区がコミュニティ・スクールとなっていますので、個々がコミュニティ・スクールとして運営して、残りは学校評議員会制度で運用しています。半々という感じですよ。私たちがやってきた多くは、活動母体があるわけではありません。学校評議員制度に責任と権限を持たせて合議制を移行して学校運営協議会を設置して意見を求める。その形が結構多いです。

質問者C：3番目は、シニアスクールの事務はどこがやっているんですか？

森 谷：シニアスクールはNPO がやっております。私がNPO の副理事長をやっています。正会員になるために10,000 円を支払って無償で仕事をさせていただいております。シニアスクールの生徒からは、授業料を取ります。週3日のところは年間40,000 円、10 ヶ月で集めますから、月4,000 円。2日のところが30,000 円、1日のところで20,000 円。その授業料と賛助会員費で運用して、講師の先生の謝金を作っております。1時間の謝金と交通費で1,500 円。2時間続けてやる人は2,500 円で運用しているという状況です。そこの事務局は、3人の担任の先生がおります。それぞれ3校ありますから、それぞれに授業料等を支払っています。我々、理事長・副理事長はお金を出して仕事をさせていただいております。それから、学校に負担

はというと、各校の教務の先生がシラバスの枠を作ります。それを講師会で説明し、教科ごとに話し合ってシラバスを完成させます。シラバスの印刷と行事による変更などの調整をお願いしています。

質問者C：そのNPOは、シニアスクールを立ち上げるために立ち上げたNPOですか？

森 谷：そうです。

質問者C：そうすると、そのNPOは単なる民間ではなくなりますよね？学校を使うわけですから。授業料を取るわけですから。だけど、学校自体の組織ではなくて、NPOという形で立ち上げて学校の施設を使っているという、そういう形態ですか？面白いですね。

森 谷：空き教室を使うためには、特別の許可を出さないといけないですよ。教育委員会のメンバーの方が、こういう手続きをしてくださいと言ったんですね。そうすると、地域の委員が「私たちは学校に協力しているのに、申請を出していちいち許可が必要なのか。校長がいいって言ったらいいじゃないか」という場面もありました。それ以後は、表立って申請のことを言わずに、学校のほうで申請を出しています。

質問者C：教育委員会は全くタッチしていないんですか？

森 谷：はい。ですから、教育委員会は良いことをやっている褒めてはくれるんだけど、お金は出してくれません。最初の3年間は、保健福祉局が高齢者の福祉事業として評価してくれ、年間100万円を3年間予算をつけてくれました。感謝しています。この取り組みも来年で10年になります。

質問者C：そういう学校運営をされている校長先生に、たまに出会うんですけど、やっぱりまだまだ少ないと思うんですよ。

これからの教員養成というか、教員になる人とか、管理職になる人に、何か一言、自分の経験を含めて社会教育の経験もあるのかなと思ったんですけど、なければいいですけど、何かその辺、ビジョンと言うか考え方をお聞かせ願えればいいなと思います。

森 谷：校長先生をずっと見ると、岡山市のほとんどみんな、疲れとるんですね。もうあと何年というのを見ると、僕はイライラしたんですけど、やっぱりビジョンとハードワークを仕掛けていかないとだめだと思っています。もうすでに学校自体がハードワークになっているんだから、そこにビジョンを示し、先生方と共有することが学校の力になっていくと思います。そのビジョンが何かというのは、校長自身が持ち、地域の人たちにも納得していただくことだと思います。例えば協同学習をやるときにも先ほどの『公立学校の挑戦』という本を持って、私も地域の有力者のところを何人か歩きました。と同時に、学校運営協議会の方で許可を取るといってもやりながら、仕掛けていきました。

私の学校では、「前へ」という言葉があります。「前へ」と言う学年通信を出している先生もいます。「前へ」とは、どういうことかと。これは倒れるときには前に倒れるんだよと。どんどん、子どもたちや保護者に押されて万歳と言って後ろに倒れるんじゃないかと。やることをやり、倒れる時には前へ向いて倒れよう、というのが信念のようです。それが教員の中心にあったというのは、ありがたいことです。

平成16年に岡輝に帰ってきたときに、生徒指導主事の先生が、「去年は校長を出せ、というのが何回もあったが、今年はゼロにしようぜ」と。そういうふうなことを言ってくれる職

員集団を頼もしく、信頼していました。

質問者C：社会教育の経験はないんですね？

森 谷：ありません。

前 城：深い議論の積み重ねで、信頼関係でできているんだろうなと思います。信頼関係というのは、初対面でできるものではないので、地域の方々との深い議論、先生同士の深い議論、こういうことの積み重ねでできてくる。

また、もう1つは、斜めの関係、これはシニアスクールで見ることができました。縦の関係というのは、親と子ども、先生と子どもの関係ですが、地域の大人がシニアスクールで入ってくると、斜めの関係になるのかなと思いました。

DVDの中で、生徒の感想で印象的だったのは、「自分を見てくれてる人がいるんだ」。この言葉がじんときまりました。自分を見てくれてる人がいるというのは、そう感じた生徒と、それを見てきた地域の方も気付いてくれたんだと思います。こうした方々の取り組みがあって、この学校は多分、地域の方々は自分のものだって感じていると思います。これは、地域の再生につながっているんだろうなと思いました。

学校、地域には人材があります。今日の講演で勇気を頂きました。森谷先生、ありがとうございました。